

序

わが国が直面している最大の課題は、少子高齢化・人口減少への対応である。第二次世界大戦後の高度経済成長期を経て、国民の平均寿命は延び、生活は豊かになったが、一方で高齢者が増え、それに伴って年金・医療・介護などの社会保障経費が著しく増加している。理学療法分野に目を向けても同じような課題が生じている。障害構造の複雑化、関連制度・関連法規の改正、予防施策の重視、地方自治促進など、社会構造の変化に伴い理学療法、なかでも地域理学療法のあり方が問われている。これまで「地域リハビリテーション」の中の「地域理学療法」という考え方で教育されてきた歴史がある。しかし、世界的な視野で見ると、リハビリテーションというのは理学療法の一領域に過ぎず、理学療法の枠組みは確実に広がっているのが現状である。このような背景から、本書では時代に応じた教科書となるべく、抜本的に「地域理学療法学」を見直す作業を行った。

本書はこれまでの成書にはない7つの特徴をもっている。

- ①「理学療法教育ガイドライン（地域理学療法学）」に準拠した最新の内容を解説する。
- ②「理学療法診療ガイドライン（地域理学療法）」に準拠する。
- ③「予防」や「防災」への理学療法士の視点がわかる。
- ④世界の動向から日本の地域理学療法を捉えた解説を意識する。
- ⑤「自己学習項目」「実習課題」を加える。
- ⑥文献レビューを提示する章を取り入れる。
- ⑦国家試験練習問題を導入する。

本書の特徴からもわかるように、理学療法の枠組み（ガイドライン）を準拠したうえで、世界的かつ最先端の視野で地域理学療法学を考えることのできる構成となっている。ここで本書の構成について、もう少しふみ込んで概説したい。

第1章では、わが国の「地域」から考えるのではなく、世界の動向から「わが国の地域」を考えるという、これまでにない視点で論述している。第2章では、地域理学療法の関連制度と関連法規について取り上げ、制度や法規を使って現在の地域理学療法を枠組みしている。第3章と第4章では、屋内外の住環境の評価や整備をリスクマネジメントも含めて考える構成になっている。第5章では、超高齢社会に伴って複雑化する疾病構造について考える章であり、脳血管疾患、パーキンソン病、骨関節障害、内部障害、小児疾患などの代表例をあげて、病期の変化に伴う地域理

学療法のあり方について紹介している。第6章では、予防分野を代表するサルコペニアと介護予防、認知症予防、転倒予防の文献レビューを提示することで、初学者が科学的に学べる構成としている。さらには予防教室の開催ノウハウといった現場で役立てられる項目も設けてある。第7章では、地域包括ケア、地域での連携、ケアマネジメントなど、重要性がクローズアップされてきている行政理学療法士の役割機能について学ぶことができる。第8章では、過去の災害の教訓から国レベルで防災と災害支援活動、そして人材育成（防災士など）が行われていることから、理学療法士の視点から防災と災害支援について考える機会をもった。

以上のことから、本書は地域理学療法を新しい視点から捉えた、新時代にふさわしい教科書であるといえる。また、自己学習項目、実習課題、国家試験練習問題も兼ね備えているため、学生や初学者への教育にも最適である。本書を有効に役立てていただければ幸いである。

2015年9月

重森健太